

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第151冊
編著者名	
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
こうどいせきだい じゅうななじ 興戸遺跡第17次	きょうたなべしこ うどこもづめいち ばん、ななばんの いち 京田辺市興戸小モ 詰1番、7番の1	26211	29	34° 48' 45"	135° 46' 16"	20110610～ 20111006	600	庁舎建替
むくのきいせきだい いきゅう・じゅう じ 椋ノ木遺跡第9・ 10次	そうらくぐんせい かちょうおおあざ しもこまこあざむ くのき・かみのき ほか 相楽郡精華町大字 下狛小字椋ノ木・ 神ノ木他	26366	46	34° 46' 25"	135° 47' 54"	20111024 ～ 20111125	3,800	建物建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
興戸遺跡第17次	古墳 集落跡	古墳 奈良～平安 中世	溝・流路 溝・柱穴 溝・流路	土師器・須恵器・砥石 土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦 瓦器・瓦質土器・陶磁器	古山陰・ 山陽併用 道に並走 する溝
椋ノ木遺跡第9・ 10次	集落跡	縄文 弥生 古墳 中世	溝・土坑 溝 古墳 溝・掘立柱建物跡	縄文土器・石器 弥生土器 土師器・須恵器 土師器・瓦器・陶磁器・五輪塔	後期古墳、 条里制に 規制され た掘立柱 建物跡や 溝

所収遺跡名	要約
興戸遺跡第17次	奈良時代の古山陰・山陽併用道と並走すると考えられる溝や柱穴群を検出した。過去の調査成果により付近に公的な施設があったことが想定されているが、今回の調査で出土した布目瓦や灰釉陶器などはそれ関連する資料といえる。 また、古墳時代の流路から当該期の土器がまとめて出土した。

椋ノ木遺跡第9・10次

今回の報告は第9・10次調査の2年度にわたる報告で、ともに遺構面を2面確認し、上層では平安～鎌倉時代の遺構、下面では縄文～古墳時代の遺構・遺物を検出した。縄文時代では、縄文時代晩期の土坑を検出し、うち1つは深鉢の単体の出土であり、土器棺墓と考えられる。そのほかに、後期以前と考えられる土器片が出土したが、同時期の明確な遺構は検出できなかった。弥生時代では、南北方向の溝を検出した。古墳時代前期の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡を検出し、中期末の古墳を新たに6基確認した。これまでの調査でみつかった古墳を合わせると8基となり、木津川の自然堤防上に多くの古墳が築かれていたことがわかった。また、これらの古墳や集落は、木津川とほぼ並行した自然堤防上に立地しており、木津川を上り下りする舟や川岸から眺められる位置にあることから、木津川の水運に携わった人物の古墳や集落であると考えられる。古墳時代後期から平安時代前期までは遺物が散発的に出土するが、出土量は極めて少なく、具体的な生活痕跡は認められない。

平安時代中期の大型の掘立柱建物跡2棟を検出し、広範囲に屋敷地が広がっている様相が明らかとなった。これらの建物は整然と立てられており、一般の集落とは異なり、荘園を実効支配していた有力者の館の可能性が指摘できる。11世紀には小規模な掘立柱建物が建てられるようになり、荘園の運営に変化があった可能性がある。12世紀末には条里地割に載る坪境溝があり、周辺の条里に関する最古の遺構とみられる。13世紀後半には井戸や柱穴などの生活遺構があり、その後、15世紀に至るまで耕作溝群が分布し、こうした溝群が廃絶した後には島畠が作られている。